

保育者養成校におけるリズム指導の実践と考察

林麻由美

Practice and consideration of the rhythm instruction in childminder training

Mayumi HAYASHI

1. はじめに

筆者はこれまで10数年間にわたり保育者養成校でピアノ演奏、弾き歌いの指導を行ってきた。その際のリズム指導では、まず、学生自身に、または、筆者と一緒に1ト2トなど数えながら拍をとり、リズムをたたいたり弾いたりしてきた。クラシックピアノ専攻の筆者も同じ様な教育を受けてきた。しかし、数年前より筆者が受講しているジャズピアノ講座における、リズム演習を経験し継続することにより、これまで行ってきた方法だけでは十分なリズム指導にならないのではないかと、学生が保育現場で行う音楽活動にもっと近づいたリズム感をできるだけ早く身に付けてほしいと考え、まず、拍を聴く、すなわち連続して打たれている音を聴くことから始め、次にそれを聴きながら一緒にリズムをたたいたり、旋律や和音を弾く演習を提示した。また、それらの演習は断片的ではなく、一曲を通して行うことが必要であると考えた。クラシックのピアノ曲の演奏時には、メトロノームを曲を通して使用することはまずない。メトロノームは速さを決める時に用いるもの、と

して使用していた。しかし、保育現場で多く触れるであろう曲のほとんどは2、4拍子系の躍動感のある曲なのでクラシックの演奏法ではなく拍のきざみにきっちりはめる演奏スタイルであると判断し、そのような演奏法をめざすため、授業において、メトロノームを多く用いて学生達に拍を聴いてもらい、また携帯電話にメトロノームのアプリを取り込んでもらい、拍を常に意識してもらうようにした。

2. ジャズピアノ講座におけるリズム演習

まず、筆者が受講しているジャズピアノ講座におけるリズム演習の一部を紹介する。

資料Aにあるように、この演習は左手でベースラインを弾きながら①～⑩のように右手でバックイング（伴奏の意、通常は左手で弾く）を入れる演習で、必ずメトロノームを使用する。

バックイングは1拍目のアタマ、1拍目のウラ、2拍目のアタマ、2拍目のウラ、3拍目のアタマ、3拍目のウラ、4拍目のアタマ、4拍目のウラの8パターンある。①～⑧は1小節目にバックイングを入れ、2小節目は休み、

⑨～⑯は 1 小節目は休み、2 小節目にバック
キングを入れる。

これを 12 小節のコード進行を基本としたジ
ャズのスタイルの 1 つであるブルースにあて
はめたものが資料 B である。

2 拍目のウラと 3 拍目のアタマにバック
キングがある楽譜を例に挙げた。右手が休みの時は
左手のベースラインとメトロノームの Beat の
みになり、それを聴きながら右手は次のバック
キングの準備をする。

この演習では、何拍目にバックキングを入
れるのか、それがアタマなのかウラなのか、と
いうことをよく認識することが必要でメトロ
ノームの Beat を注意深く聴くようになる。

筆者はこの演習を通して拍に対する意識が
ずいぶんと高まったと感じるようになった。

そこでこの演習をもとに、メトロノームを
使用するリズム指導を行った。

メトロノームを用いた授業展開に関して、
本稿では今回、次の 4 曲のピアノ曲を取り上
げた。

3. 授業における実践

(1) ♩ (四分音符) をどう感じて演奏するか。
「こいぬのマーチ」(譜例 1)

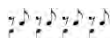
四分音符を八分音符 2 つ分の Beat で感じて
弾くことにより、正しいリズムで元気よくこ
の曲が表現できると考え、次のような練習方
法を提示した。そしてその練習過程を授業内
で一人一人確認した。

① テンポは ♩ = 120 と表示されているが、
拍を倍にとり、♩ = 190~240 に設定す
る。ウラ拍がはっきり聴こえることを

確認する。


② メトロノームのきざみを聴きながらま
ずメロディを歌う。その後、右手の練
習をする。

③ メトロノームのきざみを聴きながら左
手の練習をする。その後左手を弾きな
がら右手部分ドレミ唱で歌う。

④ 曲全体の雰囲気をつかんでもらう
ため、右手(学生) + 筆者の伴奏
 の形で全体を通す。

⑤ 両手練習をする。ゆっくりから始めて
メトロノームのきざみを聴きながら弾
けるようになるまで、繰り返し弾く。

授業ではメトロノームを使用しての片手の
演奏を必ずチェックして、学生がメトロノ
ームの Beat に乗って弾けているかを確認した。
その際、片手演奏においては、初心者であ
ってもできるだけテンポ表示に近い速さまで
繰り返し練習すること、と伝えた。これは、
現場で実際に演奏するであろうテンポにた
とえ右手だけでも近づけておくことで、そ
の曲の持つ雰囲気を体得できるからである。

(2)  (付点四分音符) の理解への導き方
「バイエル 48 番」(譜例 2)

① 左手の ♩ を ♩ = 140 位で弾く。3 拍子
なので、八分音符が 1 小節の 6 つ入る、
これを 6 本の柱が立つとイメージす
る。メトロノームのきざみを聴きなが
ら左手の四分音符を弾く。

② メトロノームのきざみを聴きながら右
手メロディを歌う。付点四分音符のミ
の音を延ばしている時に八分音符 3 つ

分のきざみが聴きとれるまで繰り返し歌う。

- ③ ②が充分にできるようになったら、右手の練習を行う。
- ④ 両手でゆっくり弾けるようになったら、徐々にメトロノームのきざみを聴きながら弾けるようにしていく。

「バイエル 52 番」(譜例 3)

バイエル 52 番は 8 分の 6 拍子である。1 小節に付点四分音符が 2 つずつ入る 2 拍子である、と理解して演奏するので、左手の分散和音の八分音符 3 つを付点四分音符の和音にしてメトロノームの八分音符のきざみを聴きながら弾く演習を提示した。和音をおさえながら、3 つ分の Beat を聴き、メロディを歌うことにより、2 拍子を感じることができるとともに、付点四分音符が八分音符 3 つ分であることが身体で感じ取れるようになる。さらに、この曲は 2 種類の和音が出てくる。言い換えれば、2 種類の和音によって構成されていることを学生に気付かせることができる。

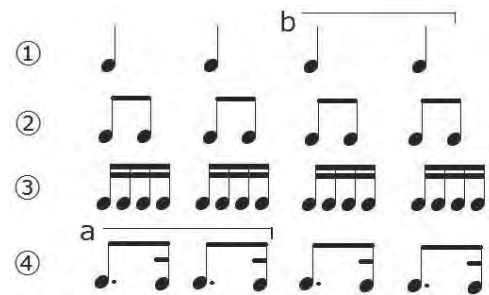
- (3) のリズムを身体でどう感じ取るか。


「バイエル 88 番」(譜例 4)

バイエルピアノ教本では88番で♪♪のリズムによる主旋律が扱われている。保育者養成校での必修として次なる課題である「こどもの歌」にはこのリズムが頻出するので、88番でしっかりと身に付けたいところである。

まず、資料 C のリズム譜を示す。

(資料 C)



メトロノーム ♩ = 120 を聴きながら①～④を
順番に手拍子する。これを何度も行ったのち、
順番を変えてさらにたたく。この後③と④を
繰り返す。そして a ➡ b を指しこの曲の冒頭
部分の  リズムを導き出す。

(4) 演習においてのさまざまな工夫

授業では、演習過程において、さまざまなオプションを付けて進める。

- i. 右手がテンポ表示近くまで弾けるようになると、筆者が隣で伴奏する。

それも、楽譜に書いてある左手部分ではなく、リズムカル且つサウンドがよりリッチになるバージョンを選んで、華やかに演奏する。そのようにして筆者と連弾する事により、学生はその曲の持つ雰囲気や直に味わうことができる。

それは更により良い効果をもたらし、後ろで順番を待つ学生たちもその演奏を聴き、一緒にメロディを口ずさんだり、体を動かすなどして楽しんでいる様子うかがえた。筆者はまた、後ろで待つ学生に対して、机で両手で交互に八分音符のリズムをたたかせたり（即ち、メトロノームのきざみ）指揮をさせたりして、拍に対する意識づけを促した。

ii. こいぬのマーチを使って既述したジャズピアノ講座のリズム演習を实践。

学生に演奏してもらい、筆者の指示により他の学生は1拍目だけ、2拍目だけ手拍子したり、1拍目と3拍目、だんだん難しくして1拍目と4拍目、という演習を行った。最初は拍のオモテのみ行うが、できるようになったら、1拍目のウラ、2拍目のウラなど、と指示を出す。また、「あなたは何拍目、あなたは何拍目」と担当する拍を指示して行うなど、こいぬのマーチだけでもさまざまな演習方法を授業で実践した。学生は自身で何拍目に手拍子するかという感覚を必死で持とうとする姿勢がみられ、拍に対する意識が高まってきたとみられた。

ピアノの授業は一コマ90分を半分にして3～4人で行うが、個人レッスンだけでなく、同じ時間を共有するグループ学習も効果的であると感じた。

こどもの歌の弾き歌いでも同じような演習が必要であると考え、以下の曲で実践した。

＊アイアイ、線路は続くよどこまでも、おもちゃのチャチャチャ、ジングルベル、むすんでひらいて、手をたたきましょう、など。

iii. ピアノ曲でリズムアンサンブルをする。
「ブルグミュラー 25 の練習」より『アラベスク』を取り上げた。(譜例5)

非常にポピュラーな曲であるが、初級者が演奏するのには大変厳しい。しかしながらバイエルの終了後に課題として課されるため必ず弾かなければならない。初級の学生がなん

とか最後まで弾けるようにしてくる努力は素晴らしいものである。難しい曲にチャレンジし、弾けるようになった、という自信はつくであろう。しかし、本当に曲を理解し、その曲を味わっているか、聴きながら演奏できているかといえば、それは怪しいと思われる。

そこで、その曲のリズムだけでも面白い、身体に残るようにしていけると、この曲に取り組んだ成果がより上がるのではないかと考え、学生6人を2つのグループに分け、それぞれ右手部分、左手部分のリズムをたたいてもらいリズムアンサンブルで全体を通した。

この結果、

- 曲全体の躍動感ある雰囲気がつかめた。
- 相手のリズムを聴いて合いの手を入れるように、自分がたたく箇所がある。
- 相手と同じリズムをたたく箇所がある。その時は全員がそろうようにするためお互いを見る。
- 最後の音は全員がそろうように誰かが合図する必要がある。

以上のようなさまざまなことが解ってきた。

この演習は保育現場における音楽活動において、非常に有効であると考ええる。

4. まとめ

以上4曲を取り上げたが、どの曲においても、学生にはたとえ初級者であっても片手、特に右手メロディについては、仕上がりテンポで弾けるまで繰り返し練習するように伝えてきた。それはその曲の持つ雰囲気、特に保

保育者養成校におけるリズム指導の実践と考察

育現場で多く取り上げられる躍動感のある曲をしっかりと体得しておく必要があるからと考えるからである。

たとえ、片手だけの演奏であっても適切なテンポできちんと拍をとり、正しいリズムで演奏していれば、充分表現でき、現場で通用する、と考える。

自身で正しく拍をとり、正確にリズムが演奏できるようになるためには、まず、連続してきざまれた拍を、断片的にではなく、曲1曲分を通して聴きながら演奏するところから始める必要がある。また、一人で演奏していても常に誰か（この場合はリズムをきざむドラムなど）と一緒にアンサンブルしているイメージを持つことが大切である。即ち、メトロノームのきざみを聴きながら弾くというのは、アンサンブルをしているという意識なのである。

このような演習を重ねていくと、次第にメトロノームなしでも、拍のきざみが身体の中で自然にイメージできて、正しいリズムで演奏できるようになる。

ピアノの基礎を学ぶ早い段階から、これらの演習が必要であり、鍵盤に触れる前にリズムをたたいたり、歌ったりすることにもっと時間をかけたほうがよいのではないか。乱暴な言い方になるが、身体にその感覚をたたき込む、感じ取らせることが大切なのである。学生の中には、次はどの指でどの鍵盤を打鍵するかということだけを必死で覚えてくる者がいる。その努力は素晴らしいが、ともするとその演奏は、ただ音が並んでいるだけなのである。そのようなアプローチでの演奏は現

場における音楽活動に対応できないであろう。学生の中には、今まで提示した練習方法を着実にこなした結果、拍の意識がかなり高まり、演奏にその成果が見られる者が多くいる。

今後も引き続きこの方法で授業を展開するとともに、更に保育者養成校での最終的な目的である「弾き歌い」に繋げられるような授業展開を探索していこうと考えている。

[参考 参考文献]

貴峰啓之 JAZZ BASIC MANUA『リズム感超強制ギプス～バックギング編』音楽之友社
幼稚園教諭 保育士養成課程『幼児のための音楽教育』教育芸術者
『バイエルピアノ教則本』全音楽譜出版社
『ブルグミュラー 25 の練習曲』音楽之友社

資料 A

The musical score consists of 16 staves, numbered 1 to 16. Each staff contains a musical phrase in G major, featuring a half note, a quarter note, and a half note, with an accent mark (^) over the first note. The phrases are arranged in two groups of eight staves each.

Staff 1: $\text{G}^{\wedge} \text{A} \text{B}$

Staff 2: $\text{G}^{\wedge} \text{A} \text{B}$

Staff 3: $\text{G}^{\wedge} \text{A} \text{B}$

Staff 4: $\text{G}^{\wedge} \text{A} \text{B}$

Staff 5: $\text{G}^{\wedge} \text{A} \text{B}$

Staff 6: $\text{G}^{\wedge} \text{A} \text{B}$

Staff 7: $\text{G}^{\wedge} \text{A} \text{B}$

Staff 8: $\text{G}^{\wedge} \text{A} \text{B}$

Staff 9: $\text{G}^{\wedge} \text{A} \text{B}$

Staff 10: $\text{G}^{\wedge} \text{A} \text{B}$

Staff 11: $\text{G}^{\wedge} \text{A} \text{B}$

Staff 12: $\text{G}^{\wedge} \text{A} \text{B}$

Staff 13: $\text{G}^{\wedge} \text{A} \text{B}$

Staff 14: $\text{G}^{\wedge} \text{A} \text{B}$

Staff 15: $\text{G}^{\wedge} \text{A} \text{B}$

Staff 16: $\text{G}^{\wedge} \text{A} \text{B}$

資料 B

2拍のウラにバックングを入れる

Four systems of piano music. Each system consists of a treble and bass staff. The key signature has one flat (B-flat). The first system has four measures, each with a treble staff chord (F7, Bb7, F7, Bb7) and a bass staff melody. The second system has four measures, each with a treble staff chord (Bb7, Bb7, F7, F7) and a bass staff melody. The third system has four measures, each with a treble staff chord (Gm7, C7, F7, F7) and a bass staff melody. The fourth system is a Coda, marked with a double bar line and a diamond symbol, with two measures of chords (F, F) and a bass staff melody.

3拍目のアタマにバックングを入れる

Four systems of piano music. Each system consists of a treble and bass staff. The key signature has one flat (B-flat). The first system has four measures, each with a treble staff chord (F7, Bb7, F7, Bb7) and a bass staff melody. The second system has four measures, each with a treble staff chord (Bb7, Bb7, F7, F7) and a bass staff melody. The third system has four measures, each with a treble staff chord (Gm7, C7, F7, F7) and a bass staff melody. The fourth system is a Coda, marked with a double bar line and a diamond symbol, with two measures of chords (F, F) and a bass staff melody.

(譜例1)

●小犬のマーチ

外国曲



♩ = 120 くらい

mf

(譜例2)

Allegretto.

48

legato

(譜例 3)

Allegretto.

52

legato

1. 2.

(譜例 4)

Moderato.

88

dolce

f p

pp p

1. 2.

(譜例 5)

Arabesque

アラベスク

Allegro scherzando ♩ = 152

2.

p

p leggiero

cresc.

f

f

dim. e poco rall.

in tempo

p

cresc.

p dolce

ten.

risoluto

f